

2025年10月12日主日礼拝説教要約  
地上でつなぐことは天でも

(マタイ18・18～20)

## 一、18章の不思議

マタイの福音書18章は不思議な章です。イエスさまの口から「教会」ということが語られているからです。18章17節です。それでもなお、言うことを聞き入れないなら、**教会に伝えなさい。教会の言うことさえも聞き入れないなら、彼を異邦人が取税人のように扱いなさい**とあります。《**教会**、すなわち「神に呼び集められた集会」ができたのは、イエスさまが十字架にかかられて三日目によりがえられ、五十日目弟子たちの上に聖霊の注ぎがあったペンテコステの日です。ならば、マタイ18章の時点では、まだ教会は誕生していないわけです。なのにイエスさまは、なぜ「教会」と語られたのでしょうか。実はイエスさまが「教会」ということを語られたと理解したのはマタイです。と言いますのは、マタイの福音書はギリシア語で書かれています。イスラエルで活動されたイエスさまはギリシア語で語られなかったからです。ではイエスさまは何語を語られたのでしょうか。長い間、キリスト教会は、アラム語を話しておられたと理解されてきました。ですが、イエスさまはヘブル語（ヘブライ語）を話しておられたという説

が出てきて、かなり有力になっていきます。それを語ったのが、しばしば引き合いに出しますがシムエル・サフライというポーランド生まれのユダヤ人で、ラビの資格を取得し、ヘブライ大学の教授で、第二神殿時代以降のユダヤ史を専門とした方でした。ユダヤ人であったイエスさまのことを研究している何名もの学者たちも提唱しています。そうしますとイエスさまは、「教会」というギリシア語に訳されるヘブライ語（ヘブル語）を語ったということになります。それはおそらく、旧約聖書にしばしば登場するイスラエルの集会（「カール」）ということばだったと考えられます。そういうことから考えますに、教会は「新しいイスラエルの集会」という意味になります。

## 二、18章18節に聞く

18節を見てまいります。《まことに、あなたがたに言います。何でもあなたがたが地上でつなぐことは天でもつなぐがれ、何でもあなたがたが地上で解くことは天でも解かれます。》とあります。《つなぐ》は、ラビ（律法の教師）が使ったことばで「禁ずる」の意味です。「解く」も、ラビが使ったことばで「許す」の意味です。イエスさまも在當時は「ラビ」と言われていましたから、そういう表現を使われたのでありましょう。ところで、マタイの福音書の

イエスさまは、どういう意味でこのことばを語られたのでしょうか。18節は、15節の《また、もしあなたの兄弟があなたに対して罪を犯したなり、行って二人だけのところで指摘しなさい。その人があなたの言うことを聞き入れるなら、あなたは自分の兄弟を得たことになりまし》につながつています。きょうだいが罪を犯した場合に、すなわち神の御意思に背を向けるようなことを、意図的にしてしまった場合です。教会が指摘しても、当該者が神の御意思に背を向け続けるなら神も許さず（赦さず）、悔い改めるなら、すなわち神に立ち返るなら神もきょうだいを許す（赦す）という意味になります。ですが適用としては、もっと広くしてかまわないと思います。と言いますのは、16章19節にも、これと似たことばが語られているからです。《わたしはあなたに天の御国の鍵を与えます。あなたが地上でつなぐことは天においてもつなぐがれ、あなたが地上で解くことは天においても解かれます》と。こちらを見ますと「天」は、すなわち「神の御住まい」は「地上」と、すなわち「私たちが生活している領域」とかなり近いという意味で受け取ることができます。祈ったことは、聖書に聞くなり、神に聞かれていることを知ります。

## 三、18章19節、20節に聞く

19節、20節を見てまいります。《まことに、もう一度あなたがたに言います。あなたがたのうちの二人が、どんなことでも地上で心を一つにして祈るなら、天におられるわたしの父はそれを行なえてくださいます。二人か三人がわたしの名において集まっているところには、わたしもその中にいるのです。》とあります。ここで私共が考えるべきは、19節のことばは18節とそのままつながっているのか、それとも19節から別のことを語られたのかです。「もう一度（略）言います」と訳しているのは、新改訳旧版と新改訳2017です。18節までに述べたことと別のことを語られたとして訳出しているのが、口語訳、新共同訳、フランススコム訳、聖書協会共同訳です。

主イエス・キリストを信じる者として、地上で「これはだめだ」「これは良い」と判断することは、天においても、すなわち神の領域においてもつながつているわけですが、その前に、地上で判断する基準は何かということが大切です。それは、主を信じる複数名が同じ判断に至った場合です。自分だけで「これは主の御意思だ」と考えても、もう一人ないしはそれ以上の信仰者たちが「いや、違つ」と言うなら、もう一度考え直したほうが良いことです。19節、20節は、そういうことが語られていると考えられます。